

研究会抄録

第Ⅳ（経済・社会合同）研究会

昭和47年後半は、引き続き R. M. ティトマス著『社会福祉と社会保障』の論読をすすめてきた。著者の多彩かつ鋭い問題意識に触発されながら、活発な論議がかわされた。

各回の報告はティトマスが触れているテーマに即して行なわれた。これらの報告の題目をあげると以下の通りである。「ティトマスの福祉国家への視点」（報告者、高橋紘士）、「社会政策と所得再分配」（報告者、地主重美）、「医療のディレンマについて」（報告者、山崎泰彦）、「医療の倫理と経済について」（報告者、都村敦子）、「児童養育費について」（報告者、小沼正）、「社会福祉管理—教育と研究」（報告者、馬場啓之助）およびティトマスを離れ福祉の概念を経済学の立場から検討した「経済厚生と外部効果」（報告者、馬場啓之助）。

そして、3月の研究会ではこれまでの論読の締めくくりとして、本誌にティトマスのこの著作に書評を寄せられた角田豊氏を招き、総括的な討論を行なった。ティトマスの提起した「福祉国家」批判をめぐり彼の福祉社会論について、また、経済成長がもたらす豊かな社会における分配政策と福祉の位置づけに関するティトマスの考え方の吟味、経済的市場と対応させつつティトマスが提出した社会的市場の概念について、そしてイデオロギーあるいは価値と、事実判断との関連についてなど多岐にわたるティトマスの問題提起を、どのように受けとめ、消化してゆくべきかという点に関わらせつつ、率直な論議がなされた。

なお昭和48年度は、貧困の問題を参加者の問題意識と関わらせつつ、インターディシプリナリーな立場から検討することになっている。

第Ⅴ（制度）研究会

イギリス、フランス、アメリカの社会保障の諸問題について山崎泰彦、工藤恒夫、藤田伍一各氏の報告によりヒヤリングを行なったほか、医療保障や医療サービスの国際動向・国際比較について、前田信雄、石本忠義両氏、社会保険論の展開について庭田範秋氏の報告を中心

に討議が行なわれた。

山崎氏の報告は、イギリス医師の brain drain の問題を中心にした最近の動向を、藤田氏の報告は、アメリカ社会保障成立期における諸問題を中心にアメリカ社会保障の性格をそれぞれ論じたものである。

工藤氏の報告は、1967～68年のフランス社会保障改革を、ラロック構想後の展開過程の分析を背景としてとらえ、改革をめぐって出された各界の意見を紹介しながら、1967～68年改革の問題点を論じたものである。報告に関連して、当初立てられた社会保障計画が、実施過程で現実との間にずれが生じ、社会経済的枠組との調整の必要が出てくる、という一般的な現象をめぐって、制度構造の弾力性、改革の方向などが議論された。

庭田氏の報告は、近年における保険の理論と現実の動向を多面的にとらえながら、それが社会保険の動きとどういう点で交叉し、または交叉しないかという観点から行なわれた。保険の発展傾向としてあげられたものは、大衆化、政策化、多様化、総合化、技術化、団体化、巨大化、金融化、平等化、他制度との関連化、国際化、動態化、競合化、などである。社会保険における保険強制は需要独占を意味するが、もし効率の悪さを供給独占によって押しつけることになれば、国民の福祉に反するのではないかといった議論も行なわれた。

医療保障の国際比較に関連して、各国の医療費統計の不完全さが指摘され、この方面の統計の本格的整備の必要性と可能性が議論された。

第Ⅵ（政策）研究会

この研究会では、社会保障の各分野におけるトピックスをとりあげているが、47年後半期には、8月を除いて5回の研究会が開かれた。

47年度に入り経済企画庁において、新しい経済計画策定の作業が開始された。7月の研究会では計画の準備作業を行なった「社会保障問題懇話会」（座長、小山進次郎）の報告書について、小山路男氏が報告を行なった。そのなかで、報告者がとくに強調した点は、国民のニーズの変化への積極的対応、事業主負担の増加を図るなど

費用負担のパターンの転換、マンパワー政策確立の重要性などである。またこの間、企画庁の作業と並行して、厚生省においても長期計画の準備がすすめられた。11月の研究会ではこれを取りあげ、蔵田直躬氏から経過報告および計画の考え方、目標水準などが報告された。

9月の「中小企業退職金共済事業団の現状について」(報告者、山下不二男)では、被共済者数の伸び率の鈍化、労働移動の高まり、インフレおよび金利低下による

財政の悪化など、中退金の直面している諸問題などが報告された。

その他、10月の「厚生年金保険制度の今後の方向」(報告者、小山路男)では、社会保険審議会の意見書をめぐって、また、12月の「難病特定疾患対策について」(報告者、仲村優一)では、社会保険医療と公費負担医療の関連について議論された。

社会保険研究所日誌 (1972. 10~12)

- 昭和47. 10. 19 第4研究会(第5回)報告内容「ティトマス著『社会福祉と社会保障』第4部I~III章について」報告者 研究員 山崎泰彦
10. 20 山田所長, ISSA 常任委員会(スイス・ジュネーブ)出席および欧州各国視察を終え帰国
10. 23~10. 26 第8回社会保障研究所基礎講座開催(都道府県会館)
10. 26 定例役員会開催(第83回)
10. 31 第2研究会(第5回)報告内容「高齢者の収入源泉別家計構造」報告者 研究員 大本圭野
- 同 第6研究会(第6回)報告内容「年金制度の今後の方向」報告者 専門委員 小山路男
- 同 ISSA 文献委員会
11. 1 第7回社会保障研究奨励賞推薦論文最終審査会(於第一ホテル)
11. 2 第1研究会(第6回)報告内容「保健費用の国際比較」報告者 研究員 城戸喜子
11. 7 昭和47年度大内賞推薦論文授賞者表彰式(第2席2名, 一圓光弥, 山崎泰彦)
11. 11 掛川高齢者世帯調査報告会(掛川市にて)
11. 14 第5研究会(第6回)報告内容「フランスの1967~68年改革をめぐる各界の意見」報告者 中央大学助教授 工藤恒夫
11. 21 第5研究会(第7回)報告内容「医療保険と医療サービスの国際比較」報告者 国立公衆衛生院 前田信雄
11. 21 第4研究会(第6回)報告内容「ティトマス

著『社会福祉と社会保障』—医療の倫理と経済について」報告者 研究員 都村敦子

11. 28 第6研究会(第7回)報告内容「長期構想について」報告者 厚生省審議官 蔵田直躬
11. 30 第3研究会(第5回)報告内容「イギリスの社会福祉行政の動向」報告者 関東学院大学助教授 市瀬幸平
12. 5 第2研究会(第6回)報告内容「同居高齢者の小遣帳の分析」報告者 山脇学園短大 杉原由機
12. 7 顧問会(第10回), 役員会(第84回), 大内基金委員会開催(於福田屋)
12. 11 第5研究会(第8回)報告内容「社会保険論の展開」報告者 慶応義塾大学教授 庭田範秋
12. 14 第1研究会(第7回)報告内容「西ドイツの年金改革」報告者 研究第1部長 保坂哲哉
12. 14 第4研究会(第7回)報告内容「経済厚生と外部効果」報告者 理事 馬場啓之助
12. 18 専門委員会「昭和48年度研究プロジェクトについて」(於ホテル・ニュージャパン)
12. 19 第2研究会(第7回)報告内容「社会的福祉の指標」報告者 東京大学助手 直井 優
12. 21 台湾中央信託局主任, 呉凱勳氏来所, 山田所長および山崎総務部長と懇談
- 同 第6研究会(第8回)報告内容「特定疾患対策について」報告者 厚生省公衆衛生局特定疾患対策室長 仲村英一
12. 26 第1研究会(第8回)報告内容「年金の経済分析」報告者 経済企画庁経済研究所主任研究官 市川・洋